北東工業 LED-UV「OLIVER650」で差別化図る
若年者育成によりJapanColorを目指す

乾燥適正を武器に差別化
攻めの企業展開に着手

北東工業（大阪市中央区、東條秀樹社長）は、1月下旬に桜井グラフィックシステムズ（桜井隆太社長）よりLED-UV乾燥装置付き菊半裁4色機「OLIVER650」を東大阪工場（東大阪市菱江4-6-44）に導入し、乾燥適正に優れた特性を活かして作業効率アップを実現させた。

一方で、1月中旬には主力機である菊全判両面8色機「J-Print」2台を水無し印刷へと移行せしファンナウトなどによる事故防止策も講じる体制を整えた。

同社の東條社長は昨年導入した桜井グラフィックシステムズの菊全判両面機「OLIVER210ZEPII」をばかりの未経験女性社員に託したのと同様、今回のLED4色機も入社1年目17歳の男性社員をオペレーターに指名した。

「印刷オペレーターとして未経験者や若手社員に高額な設備を託し、新技術の立ち上げを担わせることには大きな目的がありますが、それは、経験ではなく、教育による技術者育成のスピードアップです。これは、当社が飛躍するために必ず越えなければならない課題なのです。

オフセット印刷は決して易しい仕事ではありません。大きな金額の設備投資ですから失敗は許されません。それでも私が若手社員に夢を託すのは、業界の常識に囚われない人材育成が成功させることと、すなわち女性技術者の育成と育成期間の短期化です。正しく理論武装した技術者による、正しいOJT教育です」と東條社長は振り返る。

同機の導入に当たっては、昨秋に桜井グラフィックシステムズから菊半裁4色機導入の提案があり、桜井隆太社長の熱い気持ちが東條社長に伝わったことに始まるが、これに対して東條社長はLED化することと、インキは都インキ製を使うこと、光文堂の新春機材展での展示に間に合わせることを条件とした。

桜井グラフィックシステムズにとってもLED-UV乾燥装置搭載機の販売は初めてであり、都インキもLED-UVインキでは十分な実績はなかったが、同社を含めて力を合わせ、この大きなテーマに立ち向かうことなった。

結果、1月23日から開催された「第49回光文堂新春機材展」の会場で見事に行ち上げが披露された。

「次は、われわれが本番で立ち上げる番。しかし、その場に同行した若手オペレーターの不敵な笑みを見るにつけ、東條社長の不安は払拭された。

実際にこのLED-UV機は順調に立ち上がり、すでに本格稼働に至っている。

「関係各位はすべて未経験であったが、見事にやり遂げてくれたことに感謝しています。今度は、私たちが事業を成功させるための武器としてしっかりと運用することが、協力してくれた方々へのご恩返しです」と東條社長は述べる。

同機の導入による効果について東條社長は「LED-UV化することは全体の流れの一部でしたが、瞬間硬化によって作業効率が向上すると同時に、プロッキングなどによる事故を未然に防ぐことができるようになりました。何よりも、スプレーパウダーを使用しないので、掃除に掛ける時間の節約は絶大です」と手応えを示す。

同社はUV印刷においても25年以上のキャリアがあるが、今回のLED機導入は難易度の高い薄紙に対しても速乾が叶うことで、後工程との連携で即日納品などの提案ができる体制が整った。

実際に同機の導入によってリッチブラックを用いた薄紙印刷や特殊素材への印刷など、これまでの酸化重合印刷では不可能であった高付加価値印刷の提案を積極的に行うことにより、価格競争から抜け出し、やりがいと達成感、豊かな利益が得られる印刷会社へと成長することを目指している。

乾燥適正に優れた印刷機が導入された

菊全両面8色機で水無しを主力機2台を移行して

また同社では、主力機である菊全判両面8色機「J-Print」2台を水無し印刷へと移行させることにも成功している。

同社が既存機を水無し化へ移行する大きな要因となったのは、東條社長が昨年末、成功事例の一社である埼玉県の印刷工場を見学したことがある。

見学先の印刷会社では老朽化して品質不良が顕在化していた1995年導入のJ-自に水無し印刷を試したところ、最大の問題であったファンナウトが見事に消えて見当精度が改善した。

廃棄処分寸前の印刷機が期待すしてまだまだ使える機械へとリニューアルした様子を目の当たりにした東條社長は、早速年初から同社のJ-Print1号機でテスト印刷を開始。問題なくクリアできたことで、引き続きデルがより一般化し、いずれ本物が選ばれる時代となった時からが勝負。プロユーザーのために、常に安定した品質の印刷物が確実に届くという当たり前の安心を保障するサイトでありたいと考えています。

今挑戦している様々な取り組みをすべて越えることができれば、当社は本当の意味で全国企業へと進化することができます。日本中どこに行っても名を知られる一流の印刷企業へと進化できるかどうかは、数々の新技術の導入と運用、JapanColorの認証取得とその継続的な活用にかかっていると言っても過言ではありません」と東條社長は決意を新たにしている。

カラー認証取得に挑戦
FFGSのコンサル受け

さらに、同社では今年に入ってもうひとつの大きな挑戦としてJapanColorの認証取得を目指している。

今回は、富士フイルムグローバルグラフィックシステムズのコンサルを受けながら、新技術の導入に併せて一気に進め、入口から出口まで社内全機の標準化に取り組んでいる。

「新機、新技術導入と同時に品質の物差しも一新します。そのためには、一般的な事業所単位の認証取得ではなく、オフセット印刷機全機でJapanColor認証を取得します。当社にご発注くださったデータを、いつ誰がどの機械を使って印刷しても、常に安心できる品質であることは、全国企業として必然です」と東條社長は語る。

PrintBizの強化も図る

これらの体制を武器に、北東工業のWeb営業新設として6年前に開設した印刷通販サイト「PrintBiz（プリントビズ）」の営業強化も図っていく方向性を示している。

「PrintBiz」の登録ユーザーは既に2万社を越え、商圏は全国47都道府県に広がっていることから、社会的責任としての品質安定性を保証するためのJapanColorの認証取得である。

それに加え、デジタル印刷機の優位性24時間稼働している菊半・菊全機の利便性、さらにはLED-UV機によって乾燥適性が悪くリスクの高い薄紙への事故防止対策、速乾による超短期対応などのメリットを提案することで、付加価値を高めていく。

「印刷通販は、モニター越しにリモートで操作するコントロールできる印刷ビジネスです。付加価値を高めていく。

「印刷通販は、モニター越しにリモートで操作するコントロールできる印刷ビジネスです。付加価値を高めていく。

今後、同社ではLED-UV機や水無し印刷が本格的に立ち上がるタイミングとなる3月末をもって、永年同社の売りであった菊四のオフセット印刷機による業務を終了し、デジタル印刷機およびベビー機、菊全機への移行を図っていくことを決めている。

2号機も水無し化へと移行させた。

「主力機を水無し化しつつ、これまで同でしたが、水無しの機械構造的に限界があったファンナウト現象が抑えられることで、オペレーターの負担が大幅に軽減されました。

オフセット印刷を難しくしている原因は水だと言われますが、今回、水そのものを使わなくすることで印刷作業が飛躍的に易しくなり、事故防止と生産性向上につながったと思います。もともと高精細印刷を得意とする水無し印刷ですからデータ調整に加え色再現の自由度も広がります」と東條社長は自信を示す。

このように同社では、新技術への挑戦によって作業効率アップと事故を未然に防ぐことで、さらなる顧客満足度を高める体制が構築されたとなった。

今後、同社ではLED-UV機や水無し印刷の一層の安定化を図るためのJapanColorの認証取得を目指している。